

Evolution of Business Management and Administrative Practices in Mongolia: From Traditional Economies to Modern Enterprises

Professor B.Davaasuren, Vice President for Strategy and Investment, National University of Mongolia, Elected President of IFEAMA
Associate professor J.Sarantuya, Management Department, Business School, National University of Mongolia, Secretary of IFEAMA Mongolia

The development of business management and administration in Mongolia reflects the country's economic and political transformations over the past several decades. From centrally planned socialist economy with state-centered administration to a market –based economy embracing modern management practices. Mongolia's business landscape has undergone significant changes. This article aims to provide an overview of the evolution of business management in Mongolia, highlighting key stages, trends and intuitional developments.

Business management and administration are critical to the growth and efficiency of any economy. In Mongolia, these disciplines have evolved in parallel with the country's transition from a centrally planned system to a market-based economy, globalization and technological advancements. Understanding these changes provides insights into current business practices and managerial trends in Mongolia.

1.Pre -1990: State Administration and Centrally planned economy

Before 1990, Mongolia operated under a centrally planned socialist economic system, where private enterprises were virtually nonexistent. Management education and practice focused primarily on administrative control, production planning, and compliance with state targets, rather than profit maximization, efficiency as well as strategic decision-making (Rossabi, 2005). Higher education institutions emphasized economics, accounting, industrial organization, and planning to supply specialists for state-owned enterprises, cooperatives, and government ministries. Concepts such as marketing, financial management, and entrepreneurship were largely absent, and managerial decisions were directed by government policies rather than market forces.

2.1990-2000: Transition to Market Economy

Following the democratic revolution in 1990, Mongolia shifted to a market based economy, creating demand for managerial skills suited to private enterprise. Modern business management concepts were introduced in universities and training centers, including programs in business administration, management, finance, and marketing (Altanchimeg & Sarantuya, 2016)

3.2000-2010: Institutionalization and Professionalization

During 2000s, business management became increasingly structured and formalized. Universities introduced Bachelor's and Master's programs in Business Administration, including MBA programs, and curricula were aligned with international management standards. Core subjects included strategic management, human resource management, accounting, finance, operations, and marketing (Robbins & Coulter, 2018), (Slack, Brandon-Jones, & Burgess, 2024). This period marked the professionalization of business management in Mongolia, supported by domestic reforms and international expertise.

4.2010-Present: Digitalization, Sustainability and Modern Management Practices

Since 2010, business management in Mongolia has continued to evolve in response to globalization, technology adoption and sustainable demands. Companies increasingly integrate digital tools, data analytics, ERP systems and project management software into operations. Modern management practices now emphasize corporate social responsibility, environmental sustainability, and Environmental, Social and Governance compliance (OECD , 2021). SMEs and larger enterprises adopt strategic planning, risk management, and innovation-driven approaches, while management education has expanded with programs offered in English and aligned with international standards. These development position Mongolia's business management practices in line with global trends and prepare the private sector to compete domestically and internationally.

In conclusion, the development of business management and administration in Mongolia has been shaped by its economic, political, and social transformations. The transition from state-centered administrative management to a market-oriented, professional management system has been facilitated by higher education, private sector growth, and international cooperation. Modern trends in digitalization, sustainability and corporate governance continue to influence managerial practices. Business management in Mongolia is now a key driver for economic diversification, SME development and sustainable private sector growth.

References

- Altanchimeg, Z., & Sarantuya, J. (2016). Development of business education in Mongolia. *Mongolian Journal of Education*, 12(2), 45-53.
- B.Davaasuren, R.Sharbandi, Ch.Batbaatar etc (2024). *Mongolia's Business Climate Survey 2023*, Ulaanbaatar
- OECD . (2021). *SME and entrepreneurship policy frameworks across OECD countries: An OECD Strategy for SMEs and Entrepreneurship*. doi:<http://dx.doi.org/10.1787/9f6c41ce-en>
- Robbins , S. P., & Coulter, M. A. (2018). *Management* (14 ed.). Pearson.
- Rossabi, M. (2005). *Modern Mongolia: From Khans to Commissars to Capitalists*. Berkeley: University of California Press.
- Slack, N., Brandon-Jones, A., & Burgess, N. (2024). *Operations management* . Pearson .



モンゴルにおける経営管理研究および経営実践の発展： 伝統的経済から現代企業へ

B. ダヴァースレン 教授

(モンゴル国立大学 戦略・投資担当副学長、IFEAMA 次期会長)

J. サランツヤー 准教授

(モンゴル国立大学 ビジネススクール 経営学科、IFEAMA モンゴル事務局長)

モンゴルにおける経営管理研究および経営実践の発展は、過去数十年にわたるその経済的・政治的変革を反映している。国家主導の中央計画型社会主義経済から、現代的な経営手法を取り入れた市場主導経済へと移行する中で、モンゴルのビジネス環境は大きく変化してきた。本稿は、モンゴルにおける経営管理の発展過程を概観し、主要な段階、潮流、制度的発展を明らかにすることを目的とする。経営管理研究および経営実践は、いかなる経済においても成長と効率性の鍵を握る分野である。モンゴルでは、これらの分野は中央計画経済から市場経済への移行、グローバル化、技術革新と並行して発展してきた。これらの変化を理解することは、現在のビジネス慣行やマネジメントの潮流を把握する上で重要である。

1. 1990 年以前：国家行政と中央計画経済

1990 年以前、モンゴルは中央計画型の社会主義経済体制の下で運営されており、民間企業はほとんど存在しなかった。経営教育と実践は、利益最大化や効率性、戦略的意思決定よりも、行政的統制、生産計画、国家目標の達成に重点が置かれていた (Rossabi, 2005)。高等教育機関では、国営企業、協同組合、行政官庁に専門家を供給することを目的として、経済学、会計学、産業組織論、計画学が重視された。マーケティング、財務管理、起業家精神といった概念はほとんど存在せず、経営意思決定は市場原理ではなく政府政策によって決定されていた。

2. 1990–2000 年：市場経済への移行

1990 年の民主化革命後、モンゴルは市場主導型経済へ移行し、民間企業に適した経営管理スキルへの需要が高まった。大学や教育研修機関では、経営学、経営管理論、ファイナンス、マーケティングなど、現代的な経営管理の概念が導入された (Altanchimeg & Sarantuya, 2016)。

3. 2000–2010 年：制度化と専門職化

2000 年代に入ると、経営管理はより体系化・制度化が進んだ。大学では経営学の学士・修士課程、MBA プログ

ラムが整備され、カリキュラムは国際的な経営教育基準に合わせて改訂された。主要科目には、戦略経営、人的資源管理、会計、ファイナンス、オペレーション・リサーチ、マーケティングなどが含まれた (Robbins & Coulter, 2018; Slack, Brandon-Jones & Burgess, 2024)。この時期は、国内改革と国際的な専門知識の導入により、モンゴルにおける経営管理の専門職化が進んだ時代である。

4. 2010 年以降：デジタル化、サステナビリティ、現代的経営実践

2010 年以降、モンゴルの経営管理はグローバル化、技術導入、持続可能性への要求に応じて進化を続けている。企業はデジタルツール、データ分析、ERP システム、プロジェクト管理ソフトなどをその活動に積極的に導入している。現代の経営実践では、企業の社会的責任 (CSR)、環境持続性、ESG (環境・社会・ガバナンス) への対応が重視されている (OECD, 2021)。中小企業から大企業まで、戦略的計画、リスク管理、イノベーション主導のアプローチが採用され、経営教育も英語によるプログラムや国際基準に沿った内容へと拡大している。これらの発展はモンゴルの経営管理実践をグローバルな潮流に適合させ、国内外で競争できる民間部門の育成に寄与している。

結論

モンゴルにおける経営管理研究および経営実践の発展は、その経済・政治・社会の変革によって形作られてきた。国家主導型経営管理から、市場志向で専門的な経営管理システムへの移行は、高等教育の発展、民間部門の成長、国際協力によって支えられてきた。デジタル化、サステナビリティ、コーポレートガバナンスといった現代的潮流は、現在も経営実務に影響を与え続けている。今日、モンゴルの経営管理研究は、多様な経済の展開、中小企業の発展、持続可能な民間部門の成長を支える重要な原動力となっている。

注記：この訳出された日本語論文は、原文を Copilot で翻訳したうえで、事務局でチェックし、推敲したものである。なお参考文献は原本を参照されたい。

【産業部会・故望月前会長を偲んで】

産業部会 会長 福山義人

昨年（2025年）11月3日、享年89歳で亡くなられた産業部会前会長・望月邦彦様に対し心よりお悔やみを申し上げますと共に、追悼の言葉を贈らせていただきます。

産業部会は、東アジア経営学会国際連合という学術研究者を中心とする学会の一部門として、産業界の実務者を中心に望月前会長の音頭で設立されました。学術研究者と産業界の実務者がお互いにコミュニケーションを取り合うことで、双方がそれぞれの価値を高め合うことを目的に活動がなされてきました。しかし望月前会長にとっては理想として頭に描いてこられた姿にはまだ道半ばであったように思われます。

我々残された者は望月前会長の遺志を継ぎ、会員の皆さまとのコミュニケーションもしっかり取る中で、産業部会に集うメンバーの方々にとって価値ある組織を作り上げていきたいと思えます。

望月前会長、これまで本当にありがとうございました。安らかにお眠り下さい。

IFEAMA(東アジア経営学会国際連合)南京大会概要

産業部会 副会長 風間信隆



IFEAMA (International Federation of East Asian Management Associations) 第18回大会が中国南京市にある河海大学 (Hohai University) において2025年10月15日～19日に開催されました。本大会は「激動の世紀のアジアの経営革新」(“Asian Management Innovation in the Changing Century”)と題する大会統一テーマの下で、17の平行・セッション、4つのラウンド・テーブル、14のペーパー・セッション、2つのケーススタディ・セッションそしてジャーナル編集者との対面セッションが行われました。大会には、中国各地の大学関係者、および日本、ベトナム、カザフスタン、ラオス、モンゴルそして米国の研究者を中心に500人以上が参加する大規模な国際大会となりました。なお今大会の評議員会において新たに河海大学のZhang Yang先生がIFEAMA会長に選出されるとともに、次回の第19回大会は2027年8月(予定)にモンゴルの首都ウランバートルで開催されることも承認された。また最終日の閉会式で“Poverty reduction strategies in the emerging Philippines - Towards integrated development trajectories enabled by digital technologies”と題して報告された林先生には“Best Paper Award”が、また“Consumer Behavior and Sustainable Fashion Industry: Insights from Japanese Multinational Enterprises and Markets”と題して報告された根岸可奈子拓殖大学准教授に“Outstanding Paper Prize”が授与された。

千金 (Ju Jin) 河海大学教授の司会の下で産業部会の推薦による報告は河野良始教授 (秀明大学)、李銘氏 (深圳投資ファンド副社長) そして宝虎氏 (北海道文教大学客員教授) の3名であった。以下において3名の報告要旨を掲載することにした。



河野良治（秀明大学）



産業部会セッションの司会
于 金 河海大学商学院教授

日本における産学連携によるイノベーション

Industry-academia collaboration and innovation in Japan

河野良治（秀明大学）

日本において、イノベーション創出は地域経済活性化に資する重要な課題として位置付けられる。特に、起業率が国際比較において低位にあり、長期的な経済活力の低下が指摘されている日本では、新たな事業創出を担う起業家の育成と技術シーズの事業化促進が喫緊の課題とされる。

筆者は、2000年代以降、起業と技術経営（MOT）に関する研究と実践に携わってきた。例えば河野（2021）は、起業に向けた自己効力感の醸成に関する実証的研究を行っている。こうした教育研究に加え、イノベーション創出基盤の整備がどのように可能かを検討することが必要であるとの問題意識を有した。

イノベーションの活発な地域として知られる深圳やシリコンバレーでは起業家人材も多く、単発的なイノベーションではなく、継続的・累積的なイノベーションが生じる生態系が形成されている。この観点から、筆者は筑波大学国際産学連携本部において技術移転マネジメント業務に従事し、大学知財の事業化実務と起業家教育を経験した。筑波大学は、学際的研究を起点として CYBERDYNE 株式会社や Pixie Dust Technologies 株式会社等著名な企業を含め、多くの大学発スタートアップを輩出している。

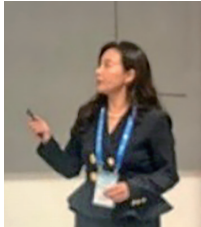
筆者は、筑波大学内の研究資源の新たな組合せを促進することによりイノベーション創出機会を増大させる制度設計の可能性を検討した。具体的にこの事業は、シュンペーターが示した「新結合」の概念に依拠し、これまでにない学際的な研究連携を産学連携という視点から評価して、イノベーション創出を制度的に誘発する取り組みである。具体的に「共同研究実用化ブースプロジェクト」を提案し、実施に至った。同事業への応募件数は、2016年度の2件から翌年以降数十倍規模へ増加し、10年が経過しようとしている。

本取組は、学問領域を横断した研究連携の促進を意図し、大学の研究資源を再構成する契機となった。公表された HP では（2025年12月23日現在）、「系横断 R&D プロジェクト」として10回目の提案を募集している。この継続的な取組は、筑波大学における学際的研究文化を更に深め、学内イノベーション基盤構築の一助となったと考える。

この取組は一定の成果を挙げた一方、既存資源の再編という枠組みに留まる課題も残されている。今後は、産学連携プロセスの分析を通じてイノベーション生態系形成メカニズムを理論化することが学術的意義を持つと考える。

グローバル・イノベーションの展望

Global Innovation Landscape – The Roots of Innovation: Talent, Capital, and Industry



李 明 (Li Ming)
深圳合衆興資産管理有限公司 副総経理

アップルの AirPods は累計 1,000 億ドル以上を稼ぎ、Mac や iPad を超える第 3 の事業セグメントとなった。この事例は、イノベーションが製品カテゴリーを再定義し、技術的障壁やエコシステム統合を通じて新たな成長を生み出すことを示している。イノベーションは現代社会で変革的役割を果たし、土地・労働・資本・起業家精神という経済発展の要素に深く関わる。本報告は効率と均衡の重要性を強調し、優位性が累積する「マタイ効果 (the Matthew Effect : 強い者はますます強く、そうでない者との格差が広がる)」による不均衡なリターンの発生を指摘する。

2024 年の主要国 GDP ランキングを踏まえ、各国のイノベーション要因を分析する。西洋とアジアでは破産に対する文化的態度が異なり、失敗への寛容さが革新を促す重要要素となる。米国は「黄金の三角形」モデルを持ち、①スタートアップから大企業まで支える成熟したエコシステム、②巨大なベンチャーキャピタル市場とリスク許容度の高い投資家、③世界的大学と移民政策による人材獲得が強みである。

一方、日本は文化的保守性、資本支援不足、人材難に直面している。高水準の国債や通貨圧力、低いスタートアップ活動、リスク回避傾向、高齢化社会、硬直的企業文化が課題であり、グローバル資本や市場との統合が必要とされる。東南アジアは米中両極に挟まれ、産業基盤の未整備や工業化からイノベーションへの移行が課題で、内部産業補完と外部市場統合が鍵となる。

インドは人口ボーナスと急速な経済成長により、今後 50 年以内に世界第 2 の経済大国になると予測される。スマートフォンや電子機器の供給網を吸収し、都市化が新たな産業機会を創出している。中国は金融面での不安定化や人口減少にもかかわらず、数十年の市場改革によるインキュベーション基盤、巨大市場と人材、活発な資本市場を背景に先端分野の持続的な研究開発が進められている。さらに文化的遺産が長期戦略思考を支え、米中競争が「自立と革新」を加速している。

結論として、経済発展を均衡論だけで捉えようとするのは誤りであり、真の進歩は民間資本による効率主導型セクターの成果にある。イノベーションは効率の最も集中した表れであり、持続可能な成長のための不可欠な基盤である。



中日友好関係：歴史的基盤、現在のダイナミクスと将来の展望

China-Japan Friendship Relations: Historical Foundations, Current Dynamics and Future Prospects



宝 虎 (Bao Hu)
北海道文教大学客員教授

中国と日本は狭い水域を挟んで隔てられており、二千年以上にわたる友好交流の歴史があります。平和と協力は常に二国間関係の主流をなしてきました。長い歴史の中で、両国は文化交流と相互学習を通じて、それぞれの社会の発展や文明の進歩を促進しただけでなく、人類の共通の幸福にも重要な貢献をしてきました。1972 年の中日間の外交関係の正常化は、二国間関係における重要なマイルストーンでした。それ以来、両国が共同署名した四つの政治文書は、中日関係の安定と発展のための堅固な政治基盤を築き、現在でも両者の友好的な協力において指導的な役割を果たしています。例えば、中国は 1000 人以上の日本のティーンエイジャーを招待し、中国を訪問させ、卓球の友好試合を再開し、大学生のための作文コンペティションを開催する計画を立てています。これにより、様々な形で若い世代の理解と認識を深め、「調和はあっても一様ではない」「心をつなげて共に働く」という価値観を広めることを目的としています。地方レベルでの姉妹都市間の協力も、二国間関係の重要な柱です。1973 年に天津と神戸が最初の姉妹都市となって以来、両国は 263 対の正式な姉妹都市関係を樹立しました。これらの都市は、経済貿易、環境保護、イノベーションの分野で広範な協力を行っています。2024 年に開催された日中地方交流促進シンポジウムでは、「イノベーションとグリーン共生」をテーマに対話を行い、2025 年の大阪万博など国際的なプラットフォームを通じて姉妹都市ネットワークのさらなる拡大について合意に達しました。経済貿易協力は日中関係における重要なつながりであり、強い活力を示しています。地域的包括的経済連携協定（RCEP）の発効により、二国間の経済貿易関係に新たな推進力が注入されました。日本企業は中国への投資に対する信頼を高めています。両国は半導体、新エネルギー車、水素エネルギーなどのハイテク産業やグリーン産業で補完的であり、産官学協力の見通しは広がっています。さらに、医療や高齢者ケア、電子商取引などの分野で、中国と日本は市場や経験を共有し、高齢化などのグローバルな課題に共同で取り組み、両国のイノベーション・相互交流を促進できるでしょう。多国間レベルにおいても、中国と日本の協力は非常に重要です。世界的な経済の減速と「反グローバリゼーション」の動きに直面して、両国はブロックチェーン・エキスポや世界博覧会などのプラットフォームを通じて経済協力を強化し、地域経済の統合を促進し、世界経済の安定を維持する上で重要な役割を果たしています。先を見据えれば、保護主義や地政学といった不確実な要因に直面しつつも、中日協力の基盤は依然として堅固です。中国経済は長期的に良好なトレンドを維持する見込みであり、科学技術革新、グリーン転換、高齢化社会への対応において、両国の協力には巨大な潜在能力があります。「次の 50 年」期間を基に、両側は交流の形式を革新し、実務的な協力を深化させ、中日関係の安定した長期的な発展を共同で促進すべきです。

変貌するグローバル化の中のアジアと アジア経営学会30周年記念



小阪 隆秀
(日本大学名誉教授・アジア経営学会名誉会長：写真左)
村田 大学
(和光大学准教授・アジア経営学会理事：写真右)

アジア経営学会は1992年に創立され、その30年の歩みを記念し、マイルストーンとして『21世紀アジア市場と日系企業—変貌するグローバル化の中の企業と戦略』（小阪隆秀・夏目啓二・村田大学編著、慶應義塾大学出版会、2025年刊行）を出版しました。

アジア経営学会国際連合（IFEAMA）は各国のアジア経営学関連学会から構成されており、アジア経営学会（JSAAM: Japan Scholarly Association for Asian Management）はそのIFEAMAの日本を代表する組織です。これら2つの学会は同時期に創立されましたが、その発案と立ち上げにリーダーシップを発揮されたのは野口祐先生（慶應義塾大学名誉教授・故人）でした。世界の代表的な経営学者との幅広い交流を基盤にして生まれてくる構想の新鮮さ、意思決定の速さとその実現性におけるスピードにおいて多くの人々の想像をいつもはるかに超えていました。今、30年の歴史を振り返るとき、改めて創立時の構想の重要性を思わすにはいられません。まさに「アジアの世紀」や「アジアは世界の成長センター」と呼ばれ、世界から注目を集め始める時期に先駆けるものでした。アジア経営学会は、それからの30年間、アジアの経済発展とともにそこでの企業の変化と発展を分析し続けてきました。

「アジアの世紀」は、ベルリンの壁の崩壊とソ連の崩壊にともなうイデオロギー対立の終焉による経済のグローバル化とともに飛躍的に進展しました。アジアは「世界の成長センター」として名実ともに機能していくことになり、中でも中国は「世界の工場」として欧米や日本などから資本や技術、知識やノウハウ、管理技術などを急速に吸収していくことになり、その中国に進出して行った国々は様々な産業分野や生産工程において相互に依存し合う構造を形成していくことになります。このような相互関連は、いわゆる「エンゲージメント・ポリシー（関与政策）」の結果でもあり、中国が経済発展していけば政治的に民主化していくと想定していたのです。しかし、中国は経済発展とともに権威主義国家として政治的体制を強化していきました。そのため、国家間で覇権を争うようになった段階で、カップリングしてきた経済・産業・生産工程などでサプライチェーンが軋み、歪み、断裂していくことになりました。

またグローバル化は、新自由主義的な競争原理のもとに国際分業を推し進めることになり、付加価値の多寡によって産業構造やサプライチェーンを再構成していくことになります。人々もどのような領域で働くかによって賃金格差が拡大していく。競争が技術革新を促進し、それによって産構造が急速に変化していくが、その変化に対するスキルアップに取り残される人々はさらに低収入となり、格差の拡大が進み「社会の分断」を生むまでになっていきます。

結果として、いま「反グローバル化」への大きな潮流が生じています。だがそれは、これまで形成されてきた国際的な経済秩序を大きく変更することになり、新たな対立や矛盾を生み出しており、ますます複雑になりつつあります。リベラルな資本主義国と権威主義国の対立だけでなく、これまで価値観を共有してきた資本主義国の間でも大きな齟齬が生じるようになりつつあります。

しかしながら、国際的な経済秩序がいかに激変しようとも、企業は国際的なサプライチェーンの形成を模索し続ける必要があります。そして、新しく形成されるサプライチェーンやプラットフォームにおいて、「代替不可能性」を目指して競争優位に立てる技術や製品を生み出していく必要があります。アジアはそのような新たな競争の場であり、日系企業の挑戦が期待される場でもあります。

今、アジア経営学会も東アジア経営学会国際連合も、このような大きな課題の前に置かれています。このような課題を乗り越えていく構想力や戦略が問われています。今こそ、30周年を越えていくにあたって、創立時の人々の情熱を引き継いでいかねばならないのではないでしょうか。

(文責：小阪隆秀)

第26回サロンのご案内

リアル(会場)とオンラインの同時開催！

【講演テーマ】

アジアから新たな新興国はどのような状況で登場してくるか
：フィリピンの事例から

【講演者】 林 倬史氏(立教大学名誉教授)

日時／2026年2月28日(土)
午後2:00～午後4:00(予定)

会場／明治大学 駿河台キャンパス
研究棟2階第9会議室
東京都千代田区神田駿河台1-1

会場のご案内



会場については以下のURLをご参照ください。
https://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/campus.html

▶講演者プロフィール

1944年北京生まれ：福岡大学商学部教員を経て立教大学経営学部、国士舘大学経営学部をそれぞれ定年退職：
主要業績：『多国籍企業と知的所有権』（森山書店、1989年）『アジアの技術発展と技術移転』（陳 炳富との共著、文眞堂、1995年）、Internationalization of Research and Emergence of Global R&D Networks, co-eds. with M.Serapio, EMERALD, 2003, 『新興国市場の特質と新たなBOP戦略』文眞堂、2016年）（アジア経営学会「学会賞」受賞）、Paradigm Shift in Technologies, co-eds. with J.Cantwell, Springer, 2019, Base of the Pyramid & Business Process Outsourcing Strategies, co-eds with H.Hoshino and Y.Hori, Springer, 2023, Strategic Management and Innovation Strategies, co-eds with Y.Sakamoto, Springer, 2024、その他。

▶講演者からの一言アピール

明治期の「富国強兵」政策では、制度・技術導入を目的として多数の外国人専門家が招聘された。その約100年後には「Japan as No.1」が世界的に注目され、日本産業の競争力が高く評価された。しかし現在、日本の名目GDPは2026年に世界5位へ後退すると見込まれており、一人当たり名目GDPも韓国・台湾を下回る水準にある。さらに50年後には人口が8700万人、高齢化率35%に達するとの推計が示されている。こうした長期的趨勢を踏まえ、本報告では人口増加と産業成長が続くフィリピンに着目し、同国のIT時代における産業構造と政策の特徴を検討する。具体的には、貧困層減少の要因、新規雇用を創出する産業とその技術基盤を分析したうえで、製造業の発展と就業者数の推移を概観する。さらにIT-BPO産業と製造業の雇用を「追加雇用乗数」により比較し、AIが雇用に及ぼす影響を考慮しつつ、IT産業の将来的位置づけを考察する。

▶参加申し込み方法

参加費は無料ですが、事前の参加申し込みが必要となります。下記の事務局の申し込みフォームからお申し込みください。
産業部会事務局 <https://forms.gle/UEmfzWQPv7v4nda8>

※オンライン参加者には、メール受付後にミーティングIDとパスワードをお知らせします。

編集後記

今回の会報は東アジア経営学会国際連合(IFEAMA)南京大会の特集号といたしました。ご多忙のところ玉稿をお寄せいただいたモンゴル国立大学副学長ダヴァスレン先生に深く感謝申し上げます。また南京大会で産業部会セッションの枠内でご報告された3名の報告者の日本語訳も掲載しました。ご逝去された望月邦彦顧問は、IFEAMA加盟学会との国際交流活動に大変ご尽力され、また部会の活動においても主導的な役割を果たしてこられました。ここに改めてそのご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(文責：産業部会副会長 風間信隆)

■発行責任者 福山義人(産業部会 会長) ■発行日 2026年1月 ■各種お問い合わせ先 産業部会事務局 幹事 風間
■E-mail info@ifeama-jis.com ■Home Page <https://www.ifeama-jis.com/>